

鎌仲ひとみ監督も参加 シカゴ大の核・原発問題 シンポジウム



土井ゆみ (どい・ゆみ)

ライター。サンフランシスコに住んで24年
西海岸の日系新聞に映画紹介を寄稿しつつ、
女のライフスタイルや生き方を考える文章を書き続けている
毎週、有機野菜の朝市に買い出しに行くのが楽しみ
著書に自身のアメリカ生活を映画を通して綴った
『サンフランシスコで映画ばかり観ていた』
(バド・ウィメンズ・オフィス刊) がある

パネラー：左からノーマ・フィールドさん(シカゴ大学東アジア言語文明学部)、鎌仲ひとみさん、
ボブ・ロスナーさん、デーブ・クラフトさん、山口智美さん ©宮本ゆき



福島原発事故以来、ヨーロッパ各地では万人
単位で脱原発のデモがあったが、アメリカではさう
ぱり盛り上がらない。先月もサンフランシスコの日
本領事館への抗議行動があったのだが、集まった人
は数十人という寂しさだった。当地は日本との関
わりの深い土地柄なのにこの無関心はどうしたこ
となのか、首をひねっていたら五月二日、シカゴ
大学で興味深い集まりが開催された。『核の時代…
広島から現代まで』と題したシンポジウムで、私
は遠くて出席は出来なかったが、主催者の一人で
あるモンタナ州立大学社会学&人類学部助教の山
口智美さんに連絡が取れたので、報告をお願いし
た。以下が彼女から届いた貴重なレポートだ。

* * *

イベントは一年前からの企画であり、別種の問題として語られがちな核兵器と原発の問題をつなげて『核の時代』の問題として考察する狙いだったのだが、三月一日、福島第一原発の事故があり、緊急性に満ちた内容となった。ちなみにシカゴ大学はマンハッタン計画*の発祥の地であり、イリノイ州は全米でもっとも原子力発電所が集中する州で、一一もの原発が稼働中である。

議論の焦点として、MTシルヴィア監督の『アト

ミックマム』、鎌仲ひとみ監督の『ミツバチの羽音と地球の回転』の二本の女性監督による映画を上映し、監督二人に加え、物理学、政治学、人類学、宗教学や文学の研究者および反原発運動家が参加したパネルディスカッションをそれぞれの作品の上映後に行った。

『アトミックマム』は、ネバダ原子力実験所で働いていた科学者を母親にもつ監督による、米国の核実験の影響についてのドキュメンタリーである。科学者として関わった人たちは核実験をめぐる事柄について、ずっと話せずにいたり、未だに強い葛藤をもち苦しみ続けていることが、母の過去についての娘である監督や、広島の被爆者女性との対話から引き出されていく。米国における核に関する秘密主義の文化、科学者の責任とは何か、それは構造的なものなのか、それとも個人の責任もあるのかといったテーマがディスカッションで話し合われた。

情報の隠蔽をもたらす秘密主義文化や、科学者および、私たちひとりひとりの責任に関する問題は『ミツバチ』で扱われる原発の問題にも直結していた。山口県上関町で進められている原発の建設計画への反対運動、および代替の自然エネルギーを模索するスウェーデンの人々を描いた作品だが、福島原発事故以降、私たちが今まさに突きつけられている課題についてのディスカッションとなっ

た。

鎌仲監督が、日本では物理学者や原子力推進の科学者が自分と同じパネルに登壇し議論をするということが自体がほとんどないのだと発言したことが印象的だった。日本では原発が経済発展にいかが必要かという情報はかり流れる反面、政府やメディアが流さない情報があまりに多い。例えば現在も放射能汚染についての情報はまったく足りておらずあまりに不十分で、福島後の今でも脱原発を恐れている状況だと監督は指摘した。

物理学者のボブ・ロスナー氏は、核兵器には反対しつつ原発に関しては推進の立場であるが、民間での原子力開発プログラムから米国が抜けるということが招く結果も真剣に考えなくてはならないと提起した。例えば米国で民間が原子力開発からひいてしまうと原子力に関する専門知識は軍が占有するということもある。脱原発が何を意味するのかを具体的に考え、米国でも日本でも情報をもっと公開し、推進側と反対側がオープンに議論することが重要だと主張した。

反原発運動家のデーブ・クラフト氏は、イリノイ州が原子力発電にあまりに依存している現状を指摘。米国にはエネルギー政策が存在していないような状態であるが、何もしなくては再生エネルギー利用も広がることもない。技術力はチェルノブイリや福島がない未来をつくりだすために使うべ

きだと語った。

私は上関原発の建設推進側の声を紹介し、今現在、町民が直面している貧困や経済・過疎問題をどうするのか、都会で電力を享受する人たちに地方の置かれた困難がわかるのかという思いや、原発建設案が三〇年もの間、地元の人々にもたらした分裂の深刻さについて報告した。

原子力問題は技術に関してのみの課題ではなく、人間がらみの問題でもあり、対立もつくりだす。そんな中で、米国も日本も秘密主義文化を脱却し、オープンに原子力問題を議論することが重要であるというのが、このシンポを通して私がかもとも強く感じたメッセージだった。だが現在、米国の日常生活の中では、福島原発事故はすでに忘れ去られてしまった感じもある。今こそ、私たちはどういった社会を求め、その社会のために一人一人が何をしていくべきなのか、考え、対話を模索していかねばならない時だというのが、

シンポジウムの詳細および関連情報は、
The Atomic Age ブログ
(<http://lucian.uchicago.edu/blogs/atomicage/>)
に掲載されています。

*第二次世界大戦中、アメリカが原子爆弾開発・製造のために科学者、技術者を総動員した国家計画で、その結果として原子爆弾が日本に投下された。